

雑 報

1969年の三原山の噴火について\*

田 沢 堅 太 郎\*\*

551.21

三原山は、1969年の1月19日に噴火をはじめ同年の7月中旬までひんぱんに小爆発をくりがえした。この期間の活動は、休止期をはさんで4つの小爆発の群に分け

ることが出来る。これらを通じて、火山現象に興味ある経過がみられたので、それを表にして示す。

爆発群	活動期間	継続日数	火山性微動の最大振幅 $A_N$	噴煙の最大高度	鳴動 $R$	空振 $\odot$	噴出物
I	1969 I, 19~II, 末	38日	9.4 $\mu$	2100 m	R <sup>o</sup> I, 10 24 25		II, 7 火口に黒色スコリヤのこんせきがみられた II, 25, 26 アワイ, 行者くつ方面に黒色火山灰降る
II	III, 15~IV, 9	24	16.4 11.3	2100	R <sup>o</sup> III, 25 26 IV, 2 3 6		
III	V, 7~15	8	18.1	1400			V, 7 ほとんど全島に黒色の火山灰が降る。とくにアワイ, 行者くつ方面に多量に降る
IV	VII, 3, 4, 15, 16	4	53.0	1200	R <sup>+</sup> VII, 3	$\odot$ <sup>s</sup> VII, 3, 4	VII, 3 火口に多量の火山毛放出 VII, 15 町町に少量の火山灰降る

この表で、火山性微動（以下、微動とする）の最大振幅  $A_N$  とは、A地点のN~S動の値である。又、A地点は火口の中心からNNWへ約0.8 kmはなれたところにある。微動の経過はN~S動1成分だけ代表させることが出来るので、ほかの成分の値は省略した。

鳴動や空振の記号の肩数字は、観測された値のうちで最大の強さであり、1・2・3はそれぞれ、小・中・大に相当する。

この表から、各群の進行にともなって次のようなことがわかる。

1. 噴火の継続日数、噴煙の高さ、鳴動はしだいに減小あるいはおとろえている。

鳴動は、はじめのころ活発でしばしば全島にわたって強く感ぜられたが、しだいにおとろえてIIIからはほとんど感ぜられなくなった。

2. これに反して、微動の最大振幅はしだいに大きくなっている。又、空振はIVになってからはじめて感じられるようになり、しばしば全島で強く感じられた。

3. 噴出物について

噴火初期の1月20日の観察では、爆発とともに少量の暗褐色の火山灰が噴き出されたが、これは火孔内既存のものであった。その後、煙の色がしだいに黒味を帯びてきた。

2月7日には、うずらの卵大の黒色新鮮なスコリヤが、ごく少量火口底に分布しているのが発見された。

その後も、爆発にともなって火山灰が噴き上げられたが、全般に量が少なくてほとんど火口付近に降るの

\* K. Tagawa: On the Eruption of Volcano Mihara, Izu-oshima Island in 1969 (Received May 6, 1970)

\*\* 大島測候所

がみられた。しかし、IとIIIの群のうちで、1日か2日間にわたって非常に多量の黒色新鮮な火山灰を噴出した。この灰は、外輪山をこえて、大部分風下にあたるアワイや行者くつ付近まで積った。地面の状態から、灰の積った深さを測定出来なかったが、木の葉をおおった状態などから判断して、アワイや行者くつでIとIIIを合せて数cmから10cmと推定される。

興味あることには、このような時には、以前、爆発のたびごとに聞こえていた鳴動が消失して、火口でも全く聞かれなくなり、きわめてしづかに多量の黒煙が吐き出

されているのがみられたことである。

IVの時期には、火山灰の量は少なく、多量の火山毛が噴き上げられた。過去にも、火山毛が噴き上げられるときには、必ず空振をともなっていることが観察されたが、これは当然のことであろう。

なお、上記活動期以外は、火口から連続してしづかに白煙が上昇するだけで、特別の変化はなくきわめて静かな状態であった。

原稿を読んでいただいた大島測候所野島弘所長にお礼申し上げます。